阜新聞　（第３種郵便物認可）

インフルエンザ猛威続く

県内の幼児2人死亡

全国的に猛威を振るうインフルエンザの死者が相次ぐ中、県内でも三日、三歳の女児と二歳の男児の二人がインフルエンザによる脳症状を示し、多臓器不全などで死亡していたことが分かった。いずれも高熱、激しいおう吐を繰り返すなど症状は共通しており、インフルエンザが原因の可能性が高い。県では同日、県内各保健所を通じて文書で医療機関に対し死亡事例を報告するとともに、県教委、県民生部とも連携し、学校、特別養護老人ホームなどの施設に厳重な注意を呼び掛けている。インフルエンザによる県内の死亡事例は初めて。

この日、県衛生環境部に入った連絡によると、女児は一月二十二日に四〇度前後の発熱とおう吐、硬直性のけいれんを起こし、地元の病院で受診。血圧降下、呼吸不全に陥って入院したが、やがて腎不全（無尿）を併発し、一週間後の二十九日に多臓器不全で亡くなった。二歳の男児は、同二十八日にやはり四〇度近い発熱で二十九日に入院。呼吸不全に心不全を合併し、二日後の三十一日に心不全で死亡している。

二人の幼児は、高熱と、飲食後間もなく激しくおう吐し、けいれんを起こすという脳症特有の症状が共通しているため、県ではインフルエンザウイルスが引き起こした脳症の可能性が高いとみている。

県では、厚生省が一月から三月末まで全国で実施している「インフルエンザの脳炎、脳症を発症した患者の動向調査」と、特養施設などに入居する高齢者の患者動向の調査を行っているが、死亡事例は初めて。衛生環境部では、「インフルエンザウイルスとみられる集団風邪も県内にまん延しており、各学校や施設、家庭では予防はもちろん、発熱やおう吐などの症状が出た時は、すぐに医療機関を受診してほしい」と厳重な注意を呼び掛けている。

県内26小中学校で集団風邪

県衛生環境部に三日入った連絡によると、岐阜市の岩野田中学校、長良西小学校など県内の二十六小中学校で集団風邪が発生し、学年・学級閉鎖となった。同日の欠席者は合わせて

小児の患者増加傾向に

岐阜市

岐阜市医師会の三日までのまとめで、同市内の一日当たりのインフルエンザ患者数は先月まで成人が小児を上回っていたが、今月に入ってから逆転。小児の患者数が増加傾向にあることが分かった。

まとめによると、一日あたり全患者数は先月十六日に八百人、同二十三日に千人に達した。その後、下旬にかけ一日八百―六百人とやや減少傾向にある。

ただし、小児は先月初旬から増加傾向をたどり、下旬から一日三百人前後で推移。今月に入り、患者数が成人と逆転した。同市では、今月に入って学年閉鎖があったほか、学級閉鎖も急増。二日現在、学年閉鎖と学級閉鎖、欠席率二〇％以上の学校は計三十校に達したという。同市医師会では、「小中学校の学級閉鎖、学年閉鎖も急増しており、しばらくの間は注意が必要」と呼びかけている。

小中学校　学級閉鎖が急増